

コミュニティワークにおける 小地域福祉活動の展開プロセスの研究

金田 喜弘

〔抄録〕

近年の地域福祉課題は、貧困問題や権利擁護、災害におけるソーシャルワークのあり方など、複雑性と多様性を併せ持っている。それらを解決するためには、これまでの領域の縦割りのみでは困難であり、横断的な協働実践を生み出す地域福祉の視点が求められている。地域福祉の推進機関である社会福祉協議会は、「協議体」、「運動体」、「事業体」の特性を持ち、総合的に実践を展開している。本稿では、コミュニティワーカーの実践事例をインタビュー調査し、その役割と機能の分析を行った。インタビューの発言から、コミュニティワーカーの機能について抽出を行い、216の項目が抽出され、24の概念、8つのサブカテゴリー、2つのカテゴリーに整理を行った。コミュニティワーカーは、様々なワーカーのスキルと、それを高めるための力だめをすることで、社協ワーカーとしてのスタンスが構築されることが明らかになった。また、小地域福祉活動の展開プロセスでは、地域支援の展開イメージを描きながら、地域組織化や様々な場づくりを行い、活動の実践と評価を行っていることが分かった。本研究は、実践事例から理論を普遍化する一手法であり、今後の地域福祉実践を分析する手がかりとなると考える。

キーワード：小地域福祉活動 社会福祉協議会 コミュニティワーク 住民主体

はじめに

1990年以降、地域福祉や地域福祉実践に対する期待が高まっている。厚生省（現・厚生労働省）の「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」（2000）では、複合的で多様性のある生活課題が顕在化し、これまでの領域の縦割りのみでは困難である事を提起している。別の言い方をすれば、今日的な課題に対応するためには、分野別の実践と併せて、横断的な実践が求められているといえる。地域福祉はまさしく、領域を超えた協働実践が特徴であり、今日の社会福祉分野の中核的役割を果たしている。武川（2006：25）は2000年以降の社会福祉の状況を「地域福祉の主流化」という言葉で表している。

地域福祉の中核的な推進機関のひとつに社会福祉協議会（以下、社協）の存在がある。社協は1951（昭和26）年に中央社会福祉協議会（現在の全国社会福祉協議会）として発足後、都道府県、そして市区町村へと全国的に設置され、地域福祉の実践を蓄積している。社協はその時代の生活課題に深く切り込み、その改善に向けた実践と運動を行ってきた。社協はその組織

特性を「協議体」、「運動体」、「事業体」と整理することができる。中央社会福祉協議会が発足する前に、社会福祉協議会準備委員会が「社会福祉協議会組織の基本要綱」（1950）を発表し、そこで「地域社会において、広く社会福祉事業の公私関係者や関心をもつものが集まって、解決を要する社会福祉の問題について調査し、協議を行い、対策を立て、その実践に必要なあらゆる手段や機能を推進し以って社会福祉事業を発展せしめ、当該地域社会の福祉を増進することを企画する民間の自主的な組織である」と規定し、協議体の性格が打ち出された。また「市区町村社協活動強化要項」（1973）においては、これまでの社協実践の評価と同時に、運動体として機能の重要性が再確認された。そのような動きがある一方で、「在宅福祉サービスの戦略」（1979）では、ホームヘルプ事業やデイサービス事業など在宅福祉サービスが地域福祉の重要な要素として位置づけられ、「予防的活動と福祉増進活動」との連動という面から、社協は在宅福祉サービスの供給システムにおける民間の中核機関としての役割を期待され、これまでの「協議体」「運動体」としての性格から「事業体」としての社協に比重が移行してきたといえる。その位置づけをさらに明確にしたのは、1992（平成4）年に「新・社会福祉協議会基本要項」である。そこでの社協の立ち位置は、地域福祉を総合的に推進するために関係者が話し合う協議体、また住民主体の活動を行う運動体であるとともに、在宅福祉サービス提供等を行う事業体であることを提示した。その後、1994（平成6）年には『「事業型社協」推進の指針」が出され、この頃から福祉サービス供給組織としての色を濃くしてきた。事業型社協への転換に対する動きについて、山口（2015:51）は「地域福祉時代におけるニーズに即した社協の役割という視点からとらえるならば、むしろ事業型社協は「運動体」と「事業型社協」を統合化し、21世紀の地域福祉を総合的に推進する方向を示すものであった」と述べている。しかし、それを体現している社協は、今日的な地域福祉課題を認識し、今後の地域福祉の推進のあり方を描き、計画的あるいは戦略的に展開しているが、全国的な動きを俯瞰するならば、一部の先進的な社協のみにとどまっているのが現状である。

昨今の貧困に関する課題や、権利擁護のあり方、災害とソーシャルワーク等の今日的課題に対応するために、全国社会福祉協議会より「社協・生活支援活動強化方針」（2012）が出され、社協のアウトリーチの重要性や地域のつながりの再構築等を目指し、行動宣言及びアクションプランが示された。また、2015（平成27）年には「福祉ビジョン2011 第2次行動指針」を示し、取り組むべき重要課題として以下の7点を整理している。すなわち、①地域における総合相談・生活支援体制の強化、確立、②地域での公益活動の展開強化、③福祉サービスの質の向上と社会福祉法人・福祉施設、社会福祉協議会の経営管理の強化、④福祉の職場の社会的評価の向上、福祉人材の確保・育成・定着の取組強化、⑤大規模災害と防災への対応の強化、⑥地域住民等の地域コミュニティへの参加環境づくり、⑦地域での計画的な福祉基盤の確立と制度改革の働きかけである。ここでも、改めて地域における様々な相談への対応と、生活支援体制の整備、そして福祉コミュニティづくりと住民参加の機会づくりが求められている。

政策的な流れとあわせて、地域福祉実践としてコミュニティソーシャルワークの取り組みも広まってきている。コミュニティソーシャルワーカーを先駆的に配置した大阪府は、その役割を制度の狭間や複数の福祉課題や既存の福祉サービスだけでは対応困難な事案の解決に取り組むとしている。その機能としては、①個別支援と地域支援の展開、②ネットワークとコーディネーション、③サービスの開発の3点に整理している。現在では、政令市・中核市を除く府内37市町村において150名のコミュニティソーシャルワーカーが市町村社協や高齢者施設などに配置されている。厚生労働省が「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」（2008）において、地域福祉を推進するための環境のひとつとして、「地域福祉コーディネーター」の必要性が明記された。その後コミュニティソーシャルワークの機能を持つ専門職の配置が全国的に配置され、地域において重要な役割を果たしている。

これまで社協は地域組織化を基盤にしながら、地域福祉の推進を図ってきた。それを基底しているのは、社会福祉援助技術のひとつであるコミュニティワーク（以下、CW）である。CWとは、専門職の介入が住民・当事者の主体形成及び、生活障害への支援の組織化を促し、その過程の中で地域の民主化および住民自治の形成を目的とする地域援助技術である。

CWの研究と実践が蓄積されることは、社協や地域福祉実践の底上げに繋がる。この10年間（2005～2014）のコミュニティソーシャルワークをタイトルにしている論文は110本投稿されている。その一方で、CWについては40本にとどまっている¹⁾。コミュニティソーシャルワーク実践が蓄積され、それに伴い、研究も増加していると考えられるが、その一方でCWに関する研究が減少している傾向が見られる。金田（2014:70）は現在の状況について、「直接的な個別支援に注目が置かれることにより、地域援助技術であるコミュニティオーガニゼーションやCWの位置が角に追いやられている帰来がある」と警鐘を鳴らしている。

本稿では、社協及びそこで実践しているCWにおける小地域福祉活動の展開プロセスを分析することにより、改めてCW実践に光をあて、コミュニティワーカーの役割や意義について考察する。

1. 本研究の目的

本研究の目的は大きく2点にあげられる。すなわち、社協職員であるコミュニティワーカーの小地域福祉活動への支援における展開プロセスであり、もうひとつは、CWの機能分析である。

地域福祉について、平野（2007:11）は「福祉の地域力」と「福祉の地域力」のベクトルが高まることで、推進されると述べている。図1にあるように、地域の福祉力とは、地域が多様性を受け入れ、活動を作り出し、地域のありようを構想していく力である。いいかえると地域の自治力とも言える。また、福祉の地域力とは専門職や行政のなかに求められる「地域に入り込み、地域の流儀に沿った、地域を生かす力」としている。地域福祉が推進するためには、地

域住民の主体力の高まりと同時に、専門職の力量の向上も求められる。それらを繋いでいるのが、社協職員であるコミュニティワーカーの役割のひとつと言える。

さて、CW の援助技術のプロセスは表1にあるように、「地域（ニーズ）の把握→地域アセスメント→計画策定・実施→評価」に整理される。地域福祉実践の現場ではこの4段階の流れが規則正しい順序で活動や計画作成が進むわけではなく、問題の発生、活動主体の発生環境が地域によって様々であるため、プロセスを行き来することもある。コミュニティワーカーは、各段階において、様々な技術を用いて地域や住民活動に関わりながら展開している。

図1 地域福祉の推進力

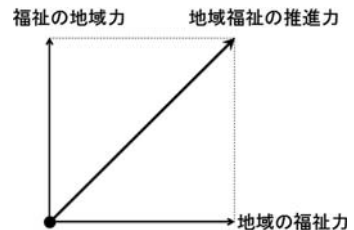


表1 コミュニティワークの展開プロセス

地域ニーズ把握	地域アセスメント	活動計画と実施	評価
<ul style="list-style-type: none"> •地域にどのような問題があるのか、また住民がどのようなニーズを抱いているのかに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> •活動主体を組織化し、その組織を母体として、対象とする地域や住民の基本的な属性を調査する 	<ul style="list-style-type: none"> •地域住民のニーズを満たし、問題を解決するための活動を計画し、実施する 	<ul style="list-style-type: none"> •実施してきた活動をふりかえる •次の展開につなげる

永田幹夫著『改訂二版 地域福祉論』全国社会福祉協議会 2000年 P193

CW 実践を展開する際には、小地域単位の推進組織・団体の存在は欠かせない。一般的にそれを、「地域福祉推進基礎組織²⁾」と総称することがあるが、実際の地域においては概ね小学校区を単位とした組織であるため、「校区福祉委員会」や「地区社会福祉協議会」等と呼ばれている。その組織では、地域福祉課題に対して、様々な地域福祉実践が行われており、ここでは、それを「小地域福祉活動」と呼ぶこととする。

2. 研究方法

本研究は、CW における小地域福祉活動の展開プロセスの分析を第一義的な目的としている。小地域福祉活動におけるコミュニティワーカーの実践事例のインタビューについて、カードワークを用いて分析を行った。塩満（2013:80）はカードワークについて「一行見出しによる質的研究」と述べており、質的研究における、データのコーディングと図式化、そしてストーリーラインの流れを意識して行った。

インタビューが語る意識的あるいは、無意識的な言葉の中に、小地域福祉活動の展開プロセスとそこでのコミュニティワーカーとしての役割や機能が込められているのではないかと仮説を立てた。金田（2014:73）は、「コミュニティワーカーが意識した行為だけではなく、無

意識に発した言葉や行為について改めて意味づけをすることで、CW 実践の役割や機能の本質が明らかになる」と述べており、「無意識の意識化³⁾」の表出をねらいとして分析を行った。

調査対象は、市町村社協において社会福祉士の資格を有し、7年以上のCWの実践経験を持つ3名のコミュニティワーカーに対して、地域組織化支援におけるCWの実践事例のインタビュー調査を行った。インタビューは、先行研究、文献をもとに作成したインタビューガイドを用いて半構造化面接によるインタビュー調査で行い、本人の同意のもと、インタビューを録音し、作成した逐語録をもとに、①各場面でのCWの意図やねらい、②各場面での社協ワーカーの想い、③社協ワーカーに求められるCWの機能に焦点をあて整理分析を行った。なお、調査期間は2013年5月～12月である。

インタビューの実施にあたり、調査対象者には本研究の目的・主旨を説明するとともに、参加協力は本人の自由であり、参加協力しない場合にも一切の不利益を受けないこと、また対象者の個人を特定できないよう倫理的な配慮を行うこと、そして研究目的以外にデータを使用しないことを説明した上で、同意を得た。あわせて、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査規程に基づき実施した。なお、表内にある引用末尾のアルファベットはインタビュー者を指しており、数字はインタビューの通し番号を示している。

3. 結果

インタビュー調査の結果については以下の通りである。コミュニティワーカーの発言から、機能について抽出を行った。ここでは216の項目が抽出され、24の概念に整理をした。

なお、インタビューについて対象者の言葉をできる限り示し、固有名詞や個人情報が特定されるものについては調査者が要約し整理を行った。

(1) コミュニティワーカーに求められる力

CWを進めるために、コミュニティワーカーは様々なスキルが求められる。ここでは、「相手との距離感を保つ」、「待つ」、「一緒に考える」、「黒子に徹する」、「受け止めから反応へ」、「ストレングス視点」、「想いを引き出す」、「様々なカードを用意」の8つの概念に整理された。ここでは、「受け止めから反応へ」と「様々なカードを用意」について説明する。

1) 受け止めから反応へ

「受け止めから反応へ」（表2）では、『いや、まさにそうなんです。この校区では、今こういう活動がほんとうに必要な時期に来てるんですっていう話をしたら、ほんとうに意気投合というような感じで（引用1）』とあるように、地域住民の想いに対して共感的理解をした上で、ワーカーとして評価し、次の一手を打つための反応を示していることが分かる。

表2 受け止めから反応へ

カテゴリー	引用番号	引用
受け止めから反応へ	引用1	「やっぱり自治会単位の、今のあの委員長、今のこの校区の福祉委員会の活動やったらかんぞと。もっとこういう取り組みが必要なんや」。ああ、この人は一貫してこれを言ってるなと思いつつも、そのとおりなんですっていうのと（中略）個人的にもほんとうに共感できるとこやったんで、いや、まさにそうなんです。この校区では、今こういう活動がほんとうに必要な時期に来てるんですっていう話をしたら、ほんとうに意気投合というような感じで。（A 111）
	引用2	このへんまで来ると、僕もほんまに、もううなずくか、はあ、いいすっねみたいなの、それだけでした。（A 239）

2) 様々なカードを用意

「様々なカードを用意」（表3）では、『他市でもやっぱりこういう地区別の活動があつてとか言って情報提供したり（引用4）』や『朝市をやるとなれば、豊中でこんな今やっててねとか、住民センターで販売ってどうかなみたいなのを調べたりとか（引用5）』にあるように、地域住民に対して、様々な方法を提供するために、アイデアや情報を収集するなど、手持ちのカードを増やすことをしていることがわかった。特に、地域住民に提示するときに、「意識的に」それを行うことが、インタビューの中で語られていた。

表3 様々なカードを用意

カテゴリー	引用番号	引用
様々なカードを用意	引用3	最後の2回ぐらいの座談会は、意識的にそういう地元での活動づくりみたいなのをビデオを流したりとか、若干のそういう提供はしましたけど（A 85）
	引用4	他市でもやっぱりこういう地区別の活動があつてとか言って情報提供したり（A 117）
	引用5	あとはもうほんとうの情報提供だけです。朝市をやるとなれば、豊中でこんな今やっててねとか、住民センターで販売ってどうかなみたいなのを調べたりとか。（A 254）
	引用6	ある面では積極的にいろんな手を変え、品を変え、働きかけはしますけども（C 275）

(2) ワーカーとしての力だめ

CW をよりよく展開するためには、スキルの発揮と同時に、ワーカーとしての蓄積が求められる。ここでは「内省」と「経験の蓄積」、「他流試合に臨む」の3つの概念に整理された。

内省とは、自分の考えや行動などを深くかえりみることであり、別の言い方とすると「自己覚知」とも言える。表4にあるように、『この時はまだそういう能力も、立場もなかったということです（引用7）』、『今やったらもっとじっくりこの人の話を聞いたり、校区の役員さんと話し合ったり、担当者と一緒に話をするかな』（引用8）にあるように、その当時のワーカーとしての力量を自己認識していることがわかった。また、『そういう言葉を聞いて、なるほどというか、納得を僕自身がしたというか（引用9）』にあるように、他者からの意見を通じて気づきが促されることもある。

表4 内省

カテゴリー	引用番号	引用
内省	引用7	この時はまだそういう能力も、立場もなかったということです（A 45）
	引用8	今やったらもっとじっくりこの人の話を聞いたり、校区の役員さんと話し合ったり、担当者と一緒に話をするかな（A 43）
	引用9	施設の連携より社協の役割やということを説明というか、話をしているときに、そういう言葉を聞いて、なるほどというか、納得を僕自身がしたというか（C 165）

（3）展開イメージを描く

コミュニティワーカーは、様々な場面を想定し、展開イメージを描きながら実践を行っている。ここでは、「アンテナを張る」、「支援の優先順位」の概念に整理することができた。コミュニティワーカーは、地域住民の実践はもちろん、そこでの活動者の想いに耳を傾けることが求められる。表5の『地域の主要なリーダー層の感覚を確かめたかった（引用10）』にあるように、今、活動者が感じている考えについて知ろうとする姿勢がうかがえる。また、活動自体の評価について、『一人の人を支えていることにつながっているという認識とか実感とかそういうことがあるのかどうか（引用11）』と確認していることが分かる。

表5 アンテナを張る

カテゴリー	引用番号	引用
アンテナを張る	引用10	そのあたりの地域のAさん個人の受け止め方じゃなくて、地域の主要なリーダー層の感覚を確かめたかった。（B 116）
	引用11	いきいきサロンをやっていることが、一人の人を支えていることにつながっているという認識とか実感とかそういうことがあるのかどうかっていうのを。（B 118）

（4）一歩先を見据えた関わり

小地域福祉活動の展開の際に、そこだけにとどまらず、一歩先を見据えた関わりを行っている。ここでは、「個別支援と地域支援の連動」と「Aさんだけに終わらせない関わり」の2つに整理することができた。「個別支援と地域支援の連動」（表6）では、『地域に関わる部分、一連の動きのものに関しては社協の役割で（中略）個別にも関わられるという条件を持ったコミュニティワーカーだと思っています（引用12）』や『制度のはざまの問題を明らかにして、それを新たな仕組みをつくっていくというのが僕らの役割（引用13）』にあるように、コミュニティワーカーは、個別支援と地域支援の両方を意識しながら、福祉コミュニティづくりを行っていることが分かる。

表6 個別支援と地域支援の連動

カテゴリ	引用番号	引用
地域個別支援の連動	引用 12	ここからここまでが自分の役割、ここからがあなたの役割じゃなくて、地域に関わる部分、一連の動きのものに関しては社協の役割で（中略）個別にも関われるという条件を持ったコミュニティワーカーだと思っています。（B 302）
	引用 13	制度のはざまの問題を明らかにして、それを新たな仕組みをつくっていくというのが僕らの役割（C 275）

(5) これまでとこれからを結ぶ

地域組織化を進める際に、今後の展開を意識しながら支援を行っている。ここでは、「新たな協働の模索」、「気づきの確認作業」の概念が示された。新たな協働の模索について、表7にあるように、『同じように課題を抱えてた施設さんも同じように鍵を預かるというのを同時に考えられてたんですね。そこの施設さんと一緒にやっていこう（引用 14）』や『あえてというか、福祉施設を巻き込んでというか、福祉施設さんと一緒にやっていくとか、地域のいわゆる資源というんですか、それを生かしていく（引用 15）』と述べられており、これまで関わっていない、組織・団体との協働を進めるために、コミュニティワーカーは可能性を模索をしていることが分かる。

表7 新たな協働の模索

カテゴリ	引用番号	引用
新たな協働の模索	引用 14	同じように課題を抱えてた施設さんも同じように鍵を預かるというのを同時に考えられてたんですね。そこの施設さんと一緒にやっていこうという話をして進んでいきますので、そことの連携が、非常にぐっと推し進めてくれたというのはあると思いますね（C 127）
	引用 15	あえてというか、福祉施設を巻き込んでというか、福祉施設さんと一緒にやっていくとか、地域のいわゆる資源というんですか、それを生かしていくというか、というところかな（C 165）

(6) 場づくり

小地域福祉活動は、表面的に見える活動の場面だけではなく、それを進めるための協議の場が求められる。ここでは、「場のプロデュース」、「学習の機会」に整理した。「場のプロデュース」（表8）として、『それを切り口に校区委員長協議会で議論を深めていきましょうかと、継続して話し合っていきましょうかという話になって（引用 16）』や、『地域の人の話を積み重ねてきたと（引用 17）』にあるように、コミュニティワーカーは対話や協議の場の機会をつくることで、活動者の問題意識を高めたり、活動の基盤づくりを支援していることが分かった。

表8 場のプロデュース

カテゴリー	引用番号	引用
場のプロデュース	引用 16	校区の委員長協議会で、うちもこんな話があって困ったわとかという話が出て、それを切り口に校区委員長協議会で議論を深めていきましょかと、継続して話し合っていましょかとという話になって（C 16）
	引用 17	この孤立死の問題だとかそういうって、地域の人の話を積み重ねてきたとか、そこは揺るぎないもんだと思うんですよ（C 286）

（7）目指す方向性

コミュニティワーカーが目指しているのは、共生のまちづくりであり、福祉コミュニティの形成である。そこでは専門職主導ではなく、そこに暮らす地域住民が主体的に考え、行動することを支援している。ここでは、「共生できる地域作りを目指す」、「生活課題から逃げない」、「住民の主体形成を忘れない」の3つの概念に整理することができた。「住民の主体形成を忘れない」（表9）では、『ずうっと地区の時代からやり続けてたことが、そのまま中心となって、活動が続いているという形です（引用 18）』とあるように、地域住民がこれまで歴史的に継続してきた活動を評価していることが読み取れる。また、『ほんとうに主体性を意識しながらなんですけど（引用 19）』の発言にもあるように、絶えず住民の主体性を基盤にしながら活動支援を行っていることが分かる。あくまでも地域住民が実践の中心であり、それを側面的に支援することを再認識していることが語られた。

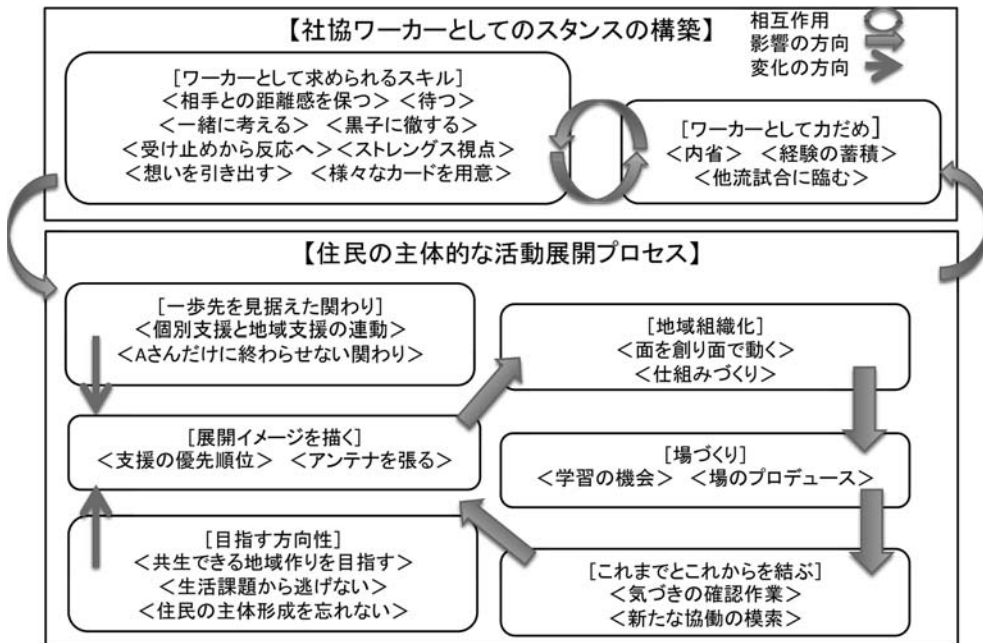
表9 住民の主体形成を忘れない

カテゴリー	引用番号	引用
住民の主体形成を忘れない	引用 18	今まで地区時代にやっていた活動がある種、そのまま継続をしながら、こういう食事会とか世代間交流とかっていうのをずうっと地区の時代からやり続けてたことが、そのまま中心となって、活動が続いているという形です（B 15）
	引用 19	ほんとうに主体性を意識しながらなんですけど（中略）いろんなところで、何か可能性があればとりあえずちょっかい出してみても、でもまあ深追いはせずみたいなのと、ここでやり続けて、最終的に何かいろんな、ほんとうにパーツがそろったみたいなのところがあるんで、それぞれにあまり無理をせず、あたため続けたみたいなのところは大きかったなという感じです（A 263）

4. 結論

本インタビュー調査の結果から、小地域福祉活動における展開プロセスとコミュニティワーカーの役割と機能について、図2の様に、8つのサブカテゴリー、2つのコアカテゴリーに整理をした。

図2 小地域福祉活動の展開プロセスとコミュニティワーカーの機能の関係性



コアカテゴリーは【 】、サブカテゴリーは[]、概念は< >で記した

(1) CW として求められるスキルと自己研鑽

【社協ワーカーのスタンスの構築】をするために、「ワーカーとして求められるスキル」を獲得し、それを効果的に用いている。小地域福祉活動を支援する際に、活動者の〈想いを引き出す〉事から行っている。その際に大切にしていることは、地域住民と共に〈一緒に考える〉姿勢である。そこでコミュニティワーカーの役割は、地域や活動組織が持っている強みを引き出す〈ストレングス視点〉である。

またコミュニティワーカーは協議の場をさらに促進させるために、〈様々なカードを用意〉しながら臨んでいる。そして、地域住民の声を聴きながら、それに関する評価と次の展開への呼び水として、〈受け止めから反応へ〉導いている。そこでのコミュニティワーカーの姿勢は、あくまでも〈黒子に徹する〉事を大切にしている。そのためには、〈相手との距離感を保つ〉ことが求められ、議論が膠着した際にも、ワーカー主導で進めるのではなく、活動者が考え、悩み、一定の方向性を示すまで〈待つ〉姿勢も重要である。

また、【社協ワーカーのスタンスの構築】には、上記のスキルと獲得するために、「ワーカーとしての力だめ」を行いながらワーカーのスタイルを形成している。自己覚知を行ったり、これまでの実践での経験を次に生かす為に〈内省〉しながら、ワーカーとしての力だめをしている。特に実践以外の場で事例検討や研修に自主的に参加し〈他流試合に臨む〉ことで自身のスキルを高めていることがわかった。その〈経験の蓄積〉とワーカーとしてのスキルは相互に関

連し合っている。つまり、自己覚知や自己研鑽での経験の蓄積が、ワーカーのスキルを高めることに繋がっており、そのスキルを獲得することで、内省にも結びついていることが明らかになった。

（2）小地域福祉活動の展開プロセス

コミュニティワーカーは、専門職としてのスタンスを構築しながら、地域福祉課題に対して、住民の主体的な活動展開を進めている。

まず、コミュニティワーカーは、絶えず〈アンテナを張る〉事で、地域住民の真の想いや願いをアセスメントしている。CW 実践におけるアセスメントについて金田（2014:77）は、大きく①地域アセスメント、②人材アセスメント、③活動組織アセスメントの3つに分類しており、これらを総合的にアセスメントすることが求められる。また、それらを踏まえて、何が地域にとって最適か、〈支援の優先順位〉を判断しつつ、[展開イメージを描く] 事を行っている。

次に、地域住民の想いや地域福祉課題を形にするために、[地域組織化] の支援を進めている。それは、点や線だけの活動ではなく、〈面を創り面で動く〉ことで、全体的な取り組みになっていく。また、地域の中で〈仕組みづくり〉をすることで、持続可能な活動が可能となる。

そして、コミュニティワーカーは、様々な[場づくり]を行っている。全国社会福祉協議会（2007:14-18）は地域福祉の推進のために、「出会いの場」、「協議の場」、「協働の場」の3つが必要と述べているが、そのような〈場のプロデュース〉を意識しながら支援している。あわせて、〈学習の機会〉を設定し、福祉教育や福祉学習の仕掛けを行っている。

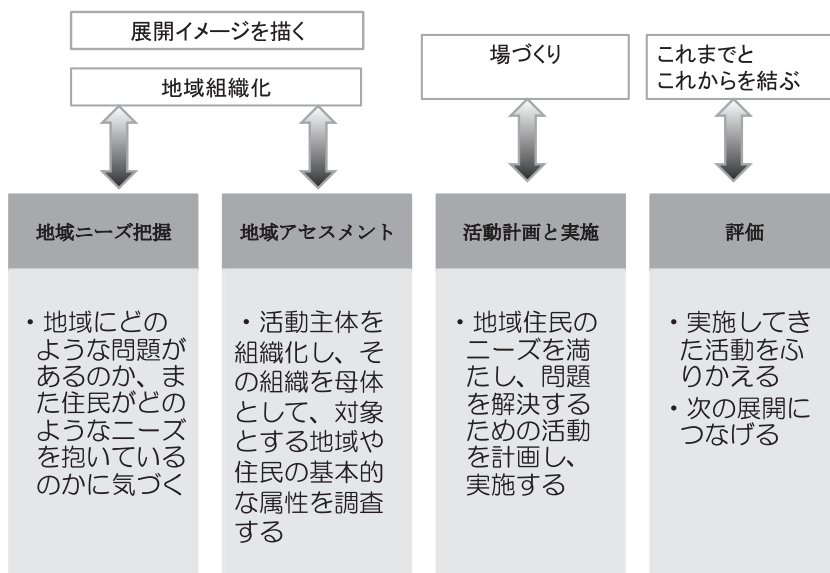
さらに、コミュニティワーカーは活動づくりを支援しながら、〈気づきの確認作業〉として、活動の評価を行い、[これまでとこれからを結ぶ] 機会を持っている。社会福祉実践の展開をPDCA サイクルで示すことがあるが、ここでは、CHECK の部分にあたる。また、これまでの活動では生まれなかった〈新たな協働の模索〉をしながら次の展開を考えている。[展開イメージを描く]、[地域組織化]、[場づくり]、[これまでとこれからを結ぶ] 実践は円環的に循環し、螺旋状に底上げしながら小地域福祉活動が展開されている。

これらの展開プロセスを進める際には、コミュニティワーカーとして[一歩先を見据えた関わり]の視点が重要となる。それは、地域で起きる様々な個別課題を〈A さんだけに終わらせない関わり〉を意識し、そこから〈個別支援と地域支援の連動〉を念頭に置きながら関わっている。それは、社会福祉専門職として、〈生活課題から逃げない〉というスタンスであり、〈共生できる地域作りを目指す〉という社会的使命を持っているからである。そして、これらを進める際には〈住民の主体形成を忘れない〉という住民主体の基本原則を常に意識していることが明らかになった。[一歩先を見据えた関わり]と[目指す方向性]は、[展開イメージを

描く] ための基盤ともなり、影響を及ぼす関係性であることが明らかになった。

CW の展開するプロセスは、「地域ニーズの把握→活動主体の組織化→活動計画・実施→評価」と先にも述べたが、今回のインタビューにおいても、そのプロセスを辿りながら展開されている事が図3の様に明らかになった。地域ニーズの把握や地域アセスメントにおいては、地域の「展開イメージを描く」や「地域組織化」の機能と結びついており、活動計画と実施のために、「場づくり」を行いながら進めている。そして、評価では、「これまでとこれからを結ぶ」ことでそれらを確認している事が明らかになった。

図3 コミュニティワークの展開プロセスとコミュニティワーカーの機能との関係性



永田幹夫著『改訂二版 地域福祉論』全国社会福祉協議会 2000年 P193より筆者が一部修正したもの

5. 今後の課題

本研究では、社協においてCWを主として実践を行っている職員の実践から、小地域福祉活動の展開プロセスとそこでのコミュニティワーカーの役割と機能について分析を行った。金田（2014:84）が述べているように、「エビデンスを実証することが困難な地域福祉実践領域」において、具体的な実践事例の語りから機能を抽出し、分析することは有効性がある事が明らかになった。

しかしながら、本研究は少数のコミュニティワーカーの実践事例から抽出し分析したものであるため、実践事例の内容や、その人の動きについて個性が高く、普遍化されたものであるとは言いがたい。今後の課題としては、継続的にコミュニティワーカーのインタビュー分析を行うことで、その普遍性を高めていきたい。また、本研究で得た知見が他のCW実践において活用できるのかどうか、検証を進めていきたいと考える。

注

- 1) CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) にて 2005 年から 2014 年までの期間において、タイトルに「コミュニティソーシャルワーク」, 「コミュニティワーク」の各用語の一致検索で行った。URL: <http://cinii.ac.jp>
- 2) 地域福祉推進基礎組織とは、地区社会福祉協議会、校区福祉委員会、まちづくり協議会福祉部会等の地縁組織を基盤としているものと整理している。
- 3) 無意識の意識については、オーストリアの精神分析学者 S. フロイトが提唱した理論である。無意識とは、人間の理性や意識がそのコントロールを超えたものによって支配されていることを示している。心には、かなえられなかった欲望が意識に上らないよう抑圧されている。この抑圧された欲望が「無意識」としているが、ここでは抑圧的な意味ではなく、ワーカーが判断した全ての行為には意味があると考え、その意味づけについて「無意識の意識化」と用いている。

参考文献

- 金田喜弘（2014）「小地域福祉活動におけるコミュニティワーカーの役割と機能」『福祉教育開発センター紀要』第11号 69-86
- 木下康仁（1999）「グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生」弘文堂
- 牧里毎治編著（2000）「地域福祉論 住民自治型地域福祉の確立をめざして」川島書店
- M. G. Ross（1967）Community Organization: Theory, Principle and Practice, Harper & Row. (=1968, 岡村重夫監訳『コミュニティ・オーガニゼーション 理論・原則と実際』全国社会福祉協議会.)
- 永田幹夫（2000）「改定二版 地域福祉論」全国社会福祉協議会
- 永田祐（2011）「ローカル・ガバナンスと参加 イギリスにおける市民主体の地域再生」中央法規
- 武川正吾（2006）「地域福祉の主流化 福祉国家と市民社会Ⅲ」法律文化社
- 高森敬久・高田真治・加納恵子ほか著（1989）「コミュニティ・ワーク 地域福祉の理論と方法」海声社
- 高森敬久・高田真治・加納恵子ほか著（2003）「地域福祉援助技術論」相川書房
- 田中千枝子編集代表 日本福祉大学大学院質的研究会編集（2012）「社会福祉・介護福祉の質的研究法 実践者のための現場研究」中央法規
- 新版・社会福祉学習双書編集委員会編（2007）「社会福祉協議会活動論」全国社会福祉協議会
- 和田敏明・渋谷篤男（2015）「概説 社会福祉協議会」全国社会福祉協議会
- 山縣文治・柏女霊峰編集委員代表（2013）「社会福祉用語事典 第9版」ミネルヴァ書房
- 全国社会福祉協議会（2007）『地域福祉をすすめる力～育てよう、生かそう「地域の福祉力」』
- 全国社会福祉協議会（2008）『地域における「新たな支え合い」を求めて－住民と行政の協働による新しい福祉－』
- 全国社会福祉協議会（2010）「全社協福祉ビジョン 2011 とともに生きる豊かな福祉社会を目指して」

付 記

本研究は平成 27 年度特別研究奨励 A「小地域福祉活動におけるコミュニティワーク及び住民主体形成に関する実践的研究」の研究成果の一部である。

(かねだ よしひろ 福祉教育開発センター)